

Title	杉山伸也名誉教授追悼特集：「お別れの会」記念講演会・講演録
Sub Title	Memorial lectures in honour of Late Professor S. Sugiyama
Author	神田, さやこ(Kanda, Sayako)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2026
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.119, No.1 (2026. 6) ,p.1- 25
JaLC DOI	10.14991/001.20260601-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20260601-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

杉山伸也名誉教授追悼特集： 「お別れの会」記念講演会・講演録

神田さやこ^{*}（企画・編集）

本特集は、2025 年 9 月 2 日にご逝去された杉山伸也慶應義塾大学名誉教授の「お別れの会」（2025 年 12 月 13 日、慶應義塾大学三田キャンパス南校舎ホールにて開催）の記念講演会の内容をまとめたものである。目次は以下のようになっている。⁽¹⁾

<目次>

1. はじめに——杉山先生のご逝去と「お別れの会」	神田さやこ
2. 杉山先生と情報通信技術の展開	池田 幸弘
3. 杉山先生からの学び	中西 聡
4. アジア経済史と杉山先生	古田 和子
5. 編集者から見た杉山先生——付 草創期の杉山研究会	高橋 弘
6. 社会経済史学会と杉山先生	馬場 哲
7. 杉山君の学問的プロフィール	斎藤 修
8. おわりに——「お別れの会」に参加して	河井 啓希

1. はじめに——杉山先生のご逝去と「お別れの会」

神田さやこ

2025 年 9 月 2 日、杉山伸也慶應義塾大学名誉教授が急逝された。先生のご冥福をお祈りし、ご研

* 慶應義塾大学経済学部

(1) 「はじめに」と「おわりに」は本特集のために書き下ろしたものである。お忙しいなか第 1 部・第 2 部ともにご出席くださり、本特集にコメント（本特集の「おわりに」として所収）をお寄せくださった河井啓希学部長、本特集の掲載をお認めいただいた『三田学会雑誌』編集委員会にはお礼を申しあげたい。

究を讀え、生前のご厚誼に感謝する機会を設けたいとの多くの声を受け、12月13日（土）に慶應義塾大学三田キャンパス・南校舎で杉山伸也先生「お別れの会」が実施された⁽²⁾。さまざまな事情で一般的な葬儀・告別式が行えなかったこともあり、生前の杉山先生にお世話になった関係者が一堂に会する機会となった。「お別れの会」は、2部構成——第1部：記念講演会（於南校舎ホール）；第2部：立食形式の偲ぶ会（於南校舎ザ・カフェテリア）であった。「お別れの会」には約130名の研究者、元同僚、慶應義塾教職員、編集者、元ゼミ生らが参集し、盛会となった。

第1部の記念講演について、多くの参加者や欠席せざるをえなかった方々から、なんとか講演録のような形で出版できないかとの相談を受けた。さらに、多くの参加者から素晴らしい講演会だったとの感想をいただいた。そこで、慶應義塾経済学会に企画書を提出し、こうして「お別れの会」の記念講演会は講演録の形で刊行される運びとなった。

記念講演会での各ご講演の詳細に入る前に、「お別れの会」当日の様子を簡単に報告したい。

第1部記念講演会は「丘の上」の独唱⁽³⁾で始まった。杉山先生がとくにお気に入りであったカレッジソングである。その後、黙禱につづいて、池田幸弘慶應義塾大学名誉教授にご挨拶いただいた。講演者として中西聡経済学部教授、古田和子慶應義塾大学名誉教授、高橋弘岩波書店監事、馬場哲東京大学名誉教授、斎藤修一橋大学名誉教授にご登壇いただき、杉山先生のご研究の原点とそこからの展開、ご研究と教育や塾内での要職との関係など、それぞれの講演者の視点から、先生のご研究・教育などについてお話しいただいた。また、長く親交があったジャネット・ハンターロンドン大学教授（Saji Professor, LSE）および石井寛治東京大学名誉教授からの追悼メッセージも読みあげられた。司会は私が担当した。

第2部の偲ぶ会は、杉山ゼミ2期生で東京科学大学教授の柳瀬博一氏の司会で、清家篤元塾長によるご挨拶からはじまった。ご挨拶は、私的なお話から2025年1月10日の福澤先生誕生記念会での杉山先生のご講演（「福澤論吉『民情一新』と「文明の利器」」）のお話まで多岐におよんだ。献杯のご発声は、経済学部の元同僚で、多くの学部業務をとともにされた木村福成慶應義塾大学名誉教授がご担当された。その後、大学院で先生の指導を受けた山口明日香関西大学教授、早稲田大学政治経済学部・大学院と正田健一郎先生のもとでともに学ばれた川勝平太前静岡県知事、研究仲間として

(2) 本「お別れの会」の企画と運営は、杉山ゼミの元学生および慶應義塾教職員らの有志で組織された実行委員会が行った。実行委員会は、川井泉、河原田賢治、神田さやこ、河野維一郎、高橋弘、中川麻衣子、山下佳樹（以上元ゼミ生）、倉橋和代（元経済学部長秘書）、山口明日香（元大学院指導学生）の9名である。実行委員長は、私がつとめた。私は、ゼミ5期生であり、修士課程でも杉山先生にご指導いただいた。その後、先生と同じロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）で博士号を取得し、経済学部の同僚にもなった。自分の経歴を振り返ってみて、どれだけ先生にお世話になったか改めて思い知った。なお、私が執筆した追悼文は、『三田評論』第1305号（2025年12月）および『社会経済史学』第91巻第4号（2026年2月）に掲載されている。

(3) 「アカベラ 04_丘の上（1～3番）[独唱]x」の使用許可を得て利用した。

長く親交があったリング・グローブ上智大学名誉教授、国際交流基金元同僚の小松諄悦氏、メディアセンターの吉沢亜希子氏、いくつかの先生のご著書を担当された慶應義塾大学出版会の木内鉄也氏、ゼミ1期生の宅間潔氏、ゼミ8期生の中川麻衣子氏が思い出話などをお話しされた。また、ゼミ8期生でフラメンコ・ダンサーの永田健氏によるダンスが披露されるなど、とても和やかな会となった。

南校舎ホールのホワイエでは、メディアセンター、岩波書店、慶應義塾大学出版会のご協力を得て、杉山先生のご著書・編著書が展示された。参加者の多くは、これらのご著書をゼミや授業で読んだことや、先生のご研究に触発されたことを懐かしく思い出されたようである。また、参加者には先生の主要業績を紹介するパンフレットも配布された。

このように可視化された先生の業績を改めて拝見すると、経済史研究の進展をいかに先導されてきたか、さらには、研究や教育の国際化、研究・教育とデジタル化・情報化など私たちが現在共有している諸問題にいち早く対応されてきたかがよく分かる。情報を重視する先生は、研究だけではなく教育の面にもそれを取りこんでいた。早くからウェブサイトを立ち上げてそこから学生が授業のレジュメを事前に受け取れるようにしたり、オンライン（e-learning）で「日本経済史」の授業を提供されていた。オンラインの「日本経済史」は、私たちの多くがあわてて授業のオンライン化に対応したコロナの時期よりはるかに前から始まっていたのだ。「君たちは今頃そんなことやっているのか。」——先生はこうおっしゃって「ハハハ」とお笑いになった。

これからお読みいただくように、記念講演会では、先生のご研究の特徴として国際化と情報化のことが主に取りあげられている。この二つは先生のご研究・教育の重要な柱であった。もう一つの柱として、エネルギーと環境の問題があったことを付記しておきたい。「エネルギーと環境の経済史」という授業を開講され、その重要性を学生に分かりやすく解説されていた。いずれにしても、現代の私たちが抱えている重要な問題である。「経済の歴史を研究するなら現在の経済・社会につねに関心をもっておくべきだ」と先生は折にふれて私たち院生におっしゃっていたことが思い出される。

それでは、記念講演会を振り返ろう。⁽⁴⁾

(4) 本追悼特集に収録されている内容は、去る2025年12月13日開催の杉山伸也先生「お別れの会」でのご挨拶・ご講演内容に加筆と修正を施したものである（「はじめに」と「おわりに」を除く）。また、メール内容などの私信の使用については、著作権継承者であるご子息の杉山顕氏よりご許可をいただいた。

2. 杉山先生と情報通信技術の展開

池田幸弘（慶應義塾大学名誉教授）

故杉山伸也先生の偲ぶ会に出席を許され、また冒頭のご挨拶をするというほまれに恵まれました。私は経済史を専門とするものではありませんので、先生の歴史家としての業績について主題的に語ることはできません。在職中先生のお仕事をいわば横からかいまみていたに過ぎません。そこで、ここでは、図書館、メディアセンター（以下、メディアと略）でのお仕事、そして先生の研究を支えてきたであろうビジョンなどについて、不十分ながら申し上げて、責をふさぎたいと考えています。

個人的な出会いについては、よく覚えていないというのが本当のところですが、先生方が組織されていた社会経済史のセミナーがありましたが、その存在について知る人ももう少なくなったと思います。大学院生も出席を許され、一度、二度出席しましたが、このセミナー自体が、短期間で消滅してしまいました。そこで、先生にお会いしているとすれば、小生が、大学院生、あるいは助手の時代かと思います。

1989年に小生は慶應義塾に奉職しましたが、順序としては、小職の採用が決まってから、先生はイギリスから一時的にもどられていたようで、古典的なカードが配置されている図書館一階でたまたまお会いしました。「よかったねー」と言われて、笑顔で迎えていただきました。

その後の学会でのご活躍、とくに経済史家としてのご貢献については、これからさまざまな角度から諸先生が語られると思いますので、私はやや周辺のことを記憶の限りで申し上げます。

当時の学部の手教員には、グループのようなものがあり、このグループは興味深いことに、専門やそれぞれの立場は超越している感がありました。故浜田裕一郎さんを中心とするグループがそれです。そこには、浜田さんのほか、若き日の細田衛士さんなども入っていたのかもしれませんが。記憶の限りで申し上げておりますが、商学部の故玉置紀夫先生のほか、中澤敏明さん、そして先般亡くなった清水雅彦先生もこのグループに入っていたように思います。杉山先生もこのグループのメンバーでありました。さらに若いわたくしの目にも、この人たちは将来学部や義塾の運営を動かしていくのではないか、という秘めやかな予感があり、それは一部的中したもの、中心であった浜田さんが亡くなってしまったので、このグループはやや空中分解の感がありました。

さて、先生は慶應義塾大学に招聘され、その後教授に昇格されましたが、そのときの論文が、『三田学会雑誌』所収の「明治前期における郵便ネットワーク：〈情報〉の経済史Ⅰ」⁽⁵⁾と題されたものです。私はその昇格審査の会にはでております。この論文は、明治前期における郵便事業の展開を追ったものですが、ここで「情報の経済史」という表現が使われていることに、私は注目したいと思います。この論文では、野口悠紀雄先生、そして後年義塾にやはり招聘されることになる池尾和人先生のお仕事と言及されています。先生が、いわゆる近代経済学における情報の理論に触発されて、歴

史家としてこれに応答しようと考えておられたことがわかります。また、同じ脚注にはさきほどふれた早世された浜田さんのお名前もでていて、両先生の議論のあとがうかがえます。推測の域をでませんが、この論文自体が、さきの浜田さんを中心とするグループ内での議論に触発されたものなのかもしれません。

私がこの論文に注目するのは、後年の先生のご関心がすでにここにうかがえるからであります。先生は近代化の推進にあたっての政府の役割についてはかならずしも肯定的ではありませんが、情報ネットワークの構築という点については、やや違ったご見解をもっていたと考えられます。そして、このような見方が、後年メディアでの仕事をされるさいの視点をすでに定めていたのではないかと、考えるのであります。

時は流れまして、先生は安西祐一郎塾長のもとで、メディアの仕事をされるようになります。以下、メディアでのご活躍やご貢献について、すこし述べてみたいと思います。

先生のお考えやご貢献は、メディアの雑誌である『MediaNet』によってだいたいその概要を知ることができます。まず、メディアセンター所長ご就任のさいの文章に着目しましょう。

就任後の文章ということもあり、まだここでは研究者としての先生という観点も色濃くでています。冒頭では、研究者をめぐる環境の激変について語られています。資料を見に行く、場合によっては偶然にまかせて資料を探すという余裕がある生活ではなくなり、どのような資料がどこにあるかはしばしば共有される知識となり、結果として「研究者としての存在意義そのものをストレートに問われる時代になった⁽⁶⁾」とおっしゃっておられる。これは分野違いの私にもよくわかる話です。

学説史研究でも特定の人物に focus する場合は、アーカイブ資料を扱います。かねてから、アーカイブを所蔵する文書館での作業は、あたかもそれぞれ異なった魚釣りに関心をもつ釣り人の作業場だと思っておりましたが、いまは昔。魚群探知機も完備されて、どこに魚がいるかはすでにわかっている。それを釣る技術が正面から問われる時代になったといえましょうか。この論考では、当時塾長だった安西祐一郎先生のもとで作成された「中期計画」についても言及がなされ、「一步先を行く図書館に」というタイトルのとおり、ライブラリアンに檄を飛ばしておられるのです。

そして、2007 年の 7 月には、グーグルとの提携が公表されます。グーグルブックス図書館プロジェクトがその正式名称で、しばしばグーグル・プロジェクトと塾内では呼ばれておりました。ここでは、プロジェクトの対象となる書籍についても「和装本約 9 万冊と」「日本語図書約 3 万冊」と

(5) 本論文は、本誌、第 79 巻第 3 号（1986 年 8 月）所収。のちに先生晩年のご著作である、杉山伸也『近代日本の「情報革命」』慶應義塾大学出版会、2024 年、第 3 章所収。情報通信技術を経済史家の立場からどのように扱うかについての先生の問題意識と逡巡については、同書の「あとがき」を参照されたい。なお、同書には福澤の『民情一新』についての章も含まれていて、先生の問題意識の展開を探る上で興味がつきない。先生の新技术にたいする関心は顕著である。先生は新しいもの好きだった。

(6) 杉山伸也「一步先を行く図書館に」『MediaNet』No. 13（2006 年）、p. 1.

紹介されています。⁽⁷⁾ グーグル・プロジェクトそのものはいわば黒船であり、図書館がそれに対応することは必然だったかもしれませんが、このプロジェクトそのものが、さきに述べたお若いときまで遡る先生の情報の公共財化という発想とはきわめて適合的であったことは強調しておきたいと思います。また、先生のメディア在職時のお仕事のなかで、このプロジェクトは重要性においてまずは他の追随を許さないものであったことはたしかでしょう。

三番目にとりあげたいのが、2009年9月に公刊された『MediaNet』に掲載された論考です。ここでは、グーグル・ブックスをめぐる著作権問題が冒頭で語られ、海外の学術雑誌市場の寡占化、高騰化も話題になっています。注意しておきたいのは、さきのプロジェクト開始時とはやや異なり、ここではグーグル・ブックスにたいするやや冷静な評価もなされているという事実です。「書籍のデジタル化といっても、基本的には紙の書籍がたんに pdf 化されているにすぎず、とりたてて目新しい点はない」とされています。また、「デジタルの利便性を最大限に追求した電子ブックが登場すれば、利用状況も大きくかわってくるだろう」⁽⁸⁾ともいわれています。あとの指摘はとくに重要です。学術的な論文で必要なページを付して典拠を示すという習慣はいまでもわれわれの領域では通例ではありますが、これはやはり書籍という紙媒体を前提にした通例でしかありません。

いままで見てきたように、先生のメディアでのご貢献は、お若いときからの情報の公共性という観点と深く結びついておりました。人も知るように、コロナのずっと前から先生はご自身の授業のオンライン配信を実行されておられました。先駆的な試みといえます。

もう、BMW でさっそうと三田キャンパスにのりつける先生の姿を見ることはできません。車中で愛用されていた夏のサングラスも見られません。大変残念に思います。その生き方においても、先生は常に前向きでした。闘う姿勢を崩すことなく、先生は完走した感があります。改めて杉山先生のご冥福を念じる次第です。

3. 杉山先生からの学び

中西 聡（慶應義塾大学経済学部教授）

杉山伸也先生に私が最初にお目にかかったのは、今から40年ほど前の1986年3月でした。当時、私は大学4年生で、東京大学経済学部の石井寛治ゼミに所属していました。その年の5月の歴史学研究会大会では、近代史部会で、「19世紀近代化過程における「外圧」と国家」というタイトルの

(7) 杉山伸也「慶應義塾とグーグル社のライブラリ・プロジェクトでの提携について」『MediaNet』No. 14 (2007年), p. 29.

(8) 杉山伸也「「Google 図書館パニック」考」『MediaNet』No. 16 (2009年), p. 2.

共通論題を行い、杉山伸也先生と石井寛治先生と梶村秀樹先生が登壇されました。⁽⁹⁾その準備研究会が、1986年3月に歴史学研究会事務室で行われ、石井寛治先生は、「中西君も大学院へ進学するのであれば、学会の雰囲気味わった方がよい」と私をその準備研究会に連れて行ってくださいました。

私はそこで初めて学会というものに触れ、学会で初めてお会いした研究者が、杉山先生と梶村先生でした。当時の私には、杉山先生の居留地貿易論と石井先生の商人的対応論の違いを十分には理解できなかったのですが、石井先生が日本から世界を見ているのに対して、杉山先生が世界から日本を見ていることは感じることができました。杉山先生は、居留地貿易という仕組みが、幕末維新期の欧米勢力の日本への進出の参入障壁になっていたとして、欧米諸国の日本への経済的外圧を低く評価したのに対し、石井先生は、開港場では欧米商人の方が日本商人よりも資金力があり、それを補うために、三都（江戸・京都・大坂）の商人が開港場の日本商人を資金的にバックアップしていたとして、欧米諸国の日本への経済的外圧の強さを日本側の商人が連携して防いだとされました。⁽¹⁰⁾いずれにしても、私はその時、大学院に進学して、たとえドメスティックな日本経済史の実証分析を行うとしても、世界的視野だけは忘れないようにしようと決意しました。

そのため、私は大学院生時代に、北海道の一漁村の細かい実証研究を行いつつ、アルバイトでは予備校で世界史の講師をして、ひたすら4年間世界史の勉強をしました。その時の世界史の講義ノートが、後に名古屋大学出版会から刊行された『世界経済の歴史』に私が執筆する際のものとなりました。⁽¹¹⁾その意味で、杉山先生は、私にとってグローバル・ヒストリーの発想を最初に与えてくださった最大の恩人となります。

その後、杉山先生と親しくお話しさせていただく機会はなかったのですが、私は1999年から名古屋大学に着任し、2005年から社会経済史学会の幹事を務めることとなり、社会経済史学会の大会でお目にかかりました。私のことは忘れておられるだろうと思ったのですが、杉山先生に「君のことは覚えているよ」とおっしゃられたのには大変感激しました。

そして、2011年に杉山先生が社会経済史学会代表理事になられた際に、私も社会経済史学会理事となり、杉山先生を支えることとなりました。当時、私は企画委員会担当理事で、企画委員会委員長の古田和子先生を中心として、若手ワークショップを始めることとなりました。⁽¹²⁾これを軌道に乗せるのが私の役目と思っていたのですが、杉山先生からお電話があり、「中西君、2012年の社会経済史学会大会を名古屋大学で開催してくれないか」と頼まれました。「私は、若手ワークショップを

(9) その時の大会報告と討論は、『歴史学研究』第560号（1986年10月）に掲載。

(10) 杉山先生の居留地貿易論については、杉山伸也『日英経済関係史研究』慶應義塾大学出版会、2017年を、石井先生の商人的対応論については、石井寛治「維新変革の基礎過程」『歴史学研究』第560号（1986年10月）を参照。

(11) 金井雄一・中西聡・福澤直樹編『世界経済の歴史』名古屋大学出版会、2010年。

(12) 若手育成ワークショップ（Next Tide Workshop = NTW）として現在も毎年企画される（現在は少し形式が変わり、新NTWと称されている）。

担当しているので」と申し上げたのですが、杉山先生は、「両方やって欲しいのだよ」とさわやかな口調でおっしゃられ、私は初めて、社会経済史学会理事になるということが何を意味するのかを悟りました。

とは言え、2012年の名古屋大学での社会経済史学会大会は、アンソニー・リード先生の特別講演があり、まさに、グローバル・ヒストリーののための大会ともなりました。⁽¹³⁾ 私は、大会実行委員長として、リード先生からご著書をいただき、天にも昇る気持ちでした。杉山先生のおかげで、このような機会をいただくことができ、本当に感謝しております。

そして、杉山先生から慶應義塾大学に来てくれないかとお誘いがあり、2013年から慶應義塾大学経済学部で杉山先生の後任として日本経済史を講義することになりました。ただし、2013年は私にとって、最大の試練の時で、杉山先生もまだ慶應義塾大学経済学部にいらっしゃって、杉山先生と私との共同で大学院講義「日本経済史」を担当することになったのです。その前年の2012年に杉山先生は、岩波書店から『日本経済史』というテキストを出され、私は、2013年に名古屋大学出版会から、中西聡編『日本経済の歴史』を刊行していました。⁽¹⁴⁾ 私は、2013年秋学期から慶應義塾大学へ移ったのですが、その年の秋学期の大学院講義「日本経済史」で、杉山先生が、「中西君たちもテキストを作ったのだから、秋学期は中西君たちのテキストを読もう」とおっしゃったのです。2013年春学期は、杉山伸也『日本経済史』を大学院講義「日本経済史」で読んだとのことで、2013年秋学期は、私がチェア席に座って、院生の質問に答えるのですが、院生の質問が、「春学期に読んだ杉山先生のテキストではこう書いているのですが、中西先生のテキストでは」と来ます。

杉山先生はお一人でテキストを書かれましたが、私の場合は、テキストを多くの執筆陣で書きましたので、全てを理解しているわけではありません。しどろもどろになっていると、教室の後ろの方から、杉山先生が「中西君、ほくも質問していいかな」と尋ねられます。まさに、名探偵に追及される犯人のような役回りでした。ただ、杉山先生の質問はとても含蓄があり、歴史的センスを問うものでした。例えば、「中西君は、鎌倉時代の日本の人口をどのくらいと考えるかな」と尋ねてこられます。最近の『社会経済史学』で、斎藤修先生が、大山喬平さんを中心とする「ムラの戸籍簿プロジェクト」の研究成果を援用して、集落数の推移から古代・中世日本の人口を推計されていますが、⁽¹⁵⁾ その当時の私にはそのような知識はありません。そこで付け焼き刃的な世界史の知識を動員して考えます。

(13) アンソニー・リード先生の大会特別講演は、アンソニー・リード（太田淳訳）「危機的環境下で歴史を書くということ」『社会経済史学』第79巻第4号（2014年2月）として『社会経済史学』に掲載された。

(14) 杉山伸也『日本経済史 近世一現代』岩波書店、2012年、中西聡編『日本経済の歴史』名古屋大学出版会、2013年。

(15) 斎藤修「ムラの戸籍簿プロジェクトと全国人口推計」『社会経済史学』第91巻第3号（2025年11月）。

「鎌倉時代の生産力をヨーロッパに当てはめると何世紀くらいを想定すればよいか、古代ギリシアのスパルタでは、生産活動に従事しない1万人の市民を10万人の奴隷の生産的活動が支えていたと言われている。社会の人口を推計するのに、生産的労働に従事しない人口がどの程度いたかを考えればよいかもしれない。源頼朝は奥州藤原氏を征服する際に、全国から約20万人の御家人・郎党を集めたと言われるが、その家族も含めると、鎌倉時代に80万人くらいの生産活動に従事しない人口が存在したと考えられる。彼らを支えるために生産に従事する人口がその10倍いたと考えると、800万～900万人くらいの人口が鎌倉時代に存在したのではないか、その後、農業生産力は室町時代後期に急速に増大して生産量は2倍以上になっているはずなので、室町時代後期の人口が1,700万人くらいで、そこから戦国時代に人口が減るとすると、近世初頭の人口とされている1,400万人前後に接続できるかな」というような回答を杉山先生にしたと記憶しています。杉山先生との議論は、歴史的なものの見方を鍛えることにつながり、正確には実証できないことをどれだけ説得力をもって推計できるかというトレーニングでもありました。

杉山先生は、2013年度で慶應義塾大学を定年退職されますが、その後も、私の研究成果は全て杉山先生にお送りし、そのたびにお返事をいただきました。最近のお返事は、2025年4月にいただいたものです。私は5年ほど前から、慶應義塾大学福澤研究センターの所員を務めており、センター内研究会として近代日本において地方の政財界で慶應義塾出身者がどのような活動をしてきたかの共同研究を進めております。その研究成果を2025年2月に発表し、⁽¹⁶⁾それをお送りしたところ、「貴兄が慶應義塾関係のテーマにとりくまれたこと、非常にうれしく思います。これからも一層の成果がありますように期待しています」とのお返事をいただきました。「中西君」から「貴兄」に出世しましたが、その杉山先生の想いを胸に、これからも研究と教育に精進したいと思います。

杉山先生、40年間本当にありがとうございました。

4. アジア経済史と杉山先生

古田和子（慶應義塾大学名誉教授）

私が研究者として、杉山伸也先生に初めてお目にかかったのは、速水融先生が慶應で開催された国際ワークショップでした。速水先生は、私が留学していたプリンストン大学に在外研究でいらっしやり、慶應での講義から解放されて自由な時間を満喫しておられ、アメリカ人の院生や私たちを

(16) 中西聡「近代日本の木曾地域社会と小野秀一」『近代日本研究』慶應義塾福沢研究センター、第41巻（2025年2月）。

車でいろいろな所に連れて行ってくださいました。そういうご縁から、1990年にルーヴァンで開催予定の第10回国際経済史会議のプレコンファレンスで報告することとなったわけです。ここで、私は中国江南の伝統的な生糸産地・湖州の農民と市場町との関係を報告し、杉山先生はコメンテータとして沢山の細かい、鋭い質問を出されました。終わってから私に、「僕、生糸の専門だから」と嬉しそうにおっしゃったことをよく覚えています。

杉山先生はロンドン大学に提出された Ph.D. 論文をもとに、1988年に *Japan's industrialization in the world economy 1859-1899: Export trade and overseas competition* ⁽¹⁷⁾ を出版され、内外で高い評価を得たことはご承知のとおりです。私は出版後あまり時間を置くことなく、書評を書く機会があり、鮮烈な印象をもって本書を読み終えました。⁽¹⁸⁾

日本の学会は問題意識、史料的検証で優れた成果を数多く生み出しているながら、その多くがキャッチフレーズのような形で提示されることが少なく、国際的なディベートになりにくいのです。その点で著者が呈示した「居留地貿易制度のパラドックス」、つまり不平等条約下にあるながら、居留地貿易が内地市場をまもる非関税障壁として日本側に有利に機能したという指摘は、議論を巧みに凝縮し、国際的な論争を誘発するにたる魅力的な論点でした。

本書は明治期の重要輸出品として生糸、茶、石炭を扱うのですが、私は、先生が石炭を分析対象に加えたこと、これがアジア経済史研究にとって重要な意味をもったと思っています。生糸・茶が欧米市場を輸出の対象としていたのに対し、石炭はアジア市場を巡ってイギリス炭・オーストラリア炭と熾烈な競争を展開します。アジアでは貿易拡大とともに蒸気船の燃料としての石炭需要が急増し、石炭補給地の確保は喫緊の課題でした。日本炭は1870年代半ばに上海市場で、次に香港市場で優位に立ち、1890年代半ばにはシンガポール市場でも50%を超えるシェアを誇ります。日本炭のアジア市場への進出は、日本の対外貿易が欧米依存型からアジア中心型への転換の過程と軌を一にしている、という先生の指摘は重要です。

私が Ph.D. 論文を提出して帰国し、新しいテーマを探している時、山川出版社が主催する研究会に声をかけてくださったのが杉山先生でした。『年報近代日本研究』第14号は明治維新の革新と連続を再考するもので、斎藤修先生・三谷博先生が担当編集者でした。杉山先生はこの研究会で、先生のご研究のもう一つの柱である情報ネットワークを取り上げて地方経済との関係について報告されました。⁽¹⁹⁾ 私は維新後の開港場・神戸を上海側の資料によって検証し、イギリス綿布の一定部分は

(17) Shinya Sugiyama, *Japan's industrialization in the world economy 1859-1899: export trade and overseas competition*, London: Athlone Press, 1988; London: Bloomsbury Publishing, 2012. (1989年第32回日経・経済図書文化賞受賞)

(18) 古田和子「書評 Sugiyama, Shinya, *Japan's industrialization in the world economy 1859-1899: export trade and overseas competition*, London: Athlone Press, 1988.」『三田学会雑誌』第83巻第1号(1990年4月)。

中国商人による上海からの再輸出であったことを示しました。⁽²⁰⁾ 研究会は日本経済史・政治史の研究者ばかりでしたが、「面白いね」と言われて執筆を進め、後に「上海ネットワーク」としてまとめる著書の基本的な枠組みになる論文を書きました。

山川の研究会と並行して、杉山伸也、濱下武志、リンダ・グローブ、谷本雅之、私の5人が集まり、流通ネットワークの歴史研究の重要性を認識して始まったのが「近代アジアの流通ネットワーク」というプロジェクトでした。木村健二、籠谷直人、北川勝彦、坂本勉などの国内メンバーに加えて、海外から林満紅、K. C. Fok、シャーマン・コ克蘭、ピーター・ポスト、イアン・ブラウンなどを迎え、熱海でプレワークショップを開き、それをミラノの第11回国際経済史会議で報告しました。

杉山先生の凄いところは、プロジェクトを組織し牽引するだけでなく、それを成果として出版されることです。本研究は杉山・グローブ編で1999年に日本語で⁽²¹⁾、2001年にはCurzon Pressから英語で出版されました。⁽²²⁾ これはひとえに先生の真面目さと勤勉さによるものです。私は杉山方式をモデルとし、その後、第15回ユトレヒト、第16回南アフリカのシュテレンボッシュ、第17回京都で開催された世界経済史会議でセッションを立ち上げ、少なくとも日本語か英語で出版することを心がけました。⁽²³⁾

さて、杉山先生のお考えで、慶應義塾大学の経済学部には「アジア経済史」が新設されたのは1997年です。私はその年に担当教員として着任しました。経済学部の科目としてアジア経済史が開設されたのは、脇村孝平先生が担当された1992年の大阪市立大学が初めてで、ごくわずかでした。

大学院には「演習」の他に複数教員による「合同演習」がありました。着任当時は、アメリカ経済史の故岡田泰男先生、日本経済史の杉山先生、柳沢遊先生、私と同時に着任した友部謙一さん、イギリス社会経済史・満洲研究の松村高夫先生、ドイツ社会史の矢野久先生で、なかなか緊張感あふれる演習でした。岡田先生は「古田さん、これ、アジアではどうなの？」と気軽にお聞きになるので、アジアといっても多様で広いのでと前置きしてお応えしていたのを思い出します。しかし、このなかで最もこわい存在は杉山先生でした。それは先生が多くの院生を抱えていらしたからだとも

(19) 杉山伸也「情報ネットワークの形成と地方経済」『年報近代日本研究』第14号、特集「明治維新の革新と連続」山川出版社、1992年。

(20) 古田和子「上海ネットワークの中の神戸——外国綿製品を運ぶ中国商人」『年報近代日本研究』第14号、特集「明治維新の革新と連続」山川出版社、1992年。古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会、2000年。

(21) 杉山伸也／リンダ・グローブ編『近代アジアの流通ネットワーク』創文社、1999年。

(22) S. Sugiyama and Linda Grove (eds.), *Commercial networks in modern Asia*, Richmond, Surrey: Curzon Press, 2001.

(23) 古田和子編著『中国の市場秩序』慶應義塾大学出版会、2013年。Kazuko Furuta and Linda Grove eds., *Imitation, Counterfeiting and the Quality of Goods in Modern Asian History*, Singapore: Springer, 2017. (DOI 10.1007/978-981-10-3752-8)

言えます。

私の大学院の演習では、アジア経済史の論文を杉山ゼミの院生と輪読し、毎回、議論が盛り上がって大変楽しかったです。今、その多くが教鞭をとられ、一人をのぞいて日本経済史を牽引する立場にいらっしやいます。一人をのぞいてと申し上げたのはインド史の神田さやこさんのことです。やがて、古田ゼミ出身の院生が出始め、大学院におけるアジア経済史の教育が本格的に始まったのは2000年代に入ってからです。

私は、毎年、アジア経済史の第1回の講義で次のようなことを言っていました。「世界のなかでアジアの人口は5割を遙かに超えるけれど、経済学部には複数いらっしやる経済史の教員のなかでアジア経済史は一人だけというのは理不尽でしょ?」。慶應の学生はこういうのは好きですから、ニヤッと笑っていました。それが現在、アジア経済史の専任教員は4名です。経済学部には「アジア経済史」の講義を置く必要性をいち早く認識された杉山先生の功績は、実に大きかったと言えます。

実は、先生からアジア経済史の教科書を二人で書かないかというお誘いがあったのですが、お断りしたのです。アジア経済史の教科書は、少なくともモンスーンアジアを全体として一つの分析対象として扱うことが必要だという思いがあったからですが、ずっと気になっていました。このたび、古田・太田編で『アジア経済史 上下』が出版でき、それを杉山先生にお送りし、「上・下巻が揃ってほっとしたでしょう」と言っていただけは本当に嬉しかったです。

先生とは昨年7月初めに長電話をしました。ちょうど検査入院から退院されたところでしたが、これから書かなければならない本を列挙されていたので、先生の計報はまことに悔しく、残念で仕方がありません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

5. 編集者から見た杉山先生——付 草創期の杉山研究会

高橋 弘（岩波書店）

先生との関わり

杉山先生との関係は、1985年に杉山ゼミの1期生になったことに始まり、先生の死去まで40年にわたりました。その最初の4年間で先生と学生（ゼミ2年+修士課程2年）、その後の36年間で著者と編集者という関係でした。今回与えられたテーマは「編集者から見た杉山先生」でしたが、実際に著者と編集者との関係になったのは早くても20世紀末で、それまでは、ゼミ出身の駆け出しの編集者がいろいろな相談をして、先生が適確なコメントをくださったということに終始してしま

(24) 古田和子・太田淳編『アジア経済史 上下』岩波書店、2024-25年。

た。先生は私が1989年に就職する以前から、岩波書店の企画に関わっておられ、⁽²⁵⁾ベテランの編集者が複数、先生の担当についていたので、私がそこに割り込む余地はありませんでした。

先生の書籍の企画に関わるようになったのは、貿易に関する論考をまとめる研究書が最初で⁽²⁶⁾す。ただ企画だけ決めたものの実際に始動したのは後述するように先生が退職された後で、最終稿の完成は先生が亡くなる直前の2025年7月でした。

『「帝国」日本の学知』

21世紀になって、編集部の同僚が、酒井哲哉先生（当時、東京大学大学院総合文化研究科）、山室信一先生（当時、京都大学人文科学研究所）と相談を重ねて、『岩波講座「帝国」日本の学知⁽²⁷⁾』というシリーズを立ち上げようとしていました。その同僚に「経済学分野」の編集委員の人選を相談されて、杉山先生をこの講座に引きずり込むことになりました。

先生は、同講座全体の編集委員と、第2巻『「帝国」の経済学⁽²⁸⁾』の責任編集を務め、この巻の構想から執筆者の人選までをこなされました。先生はかつて国際交流基金で『国際交流』という雑誌の編集をされていたこともあって、企画のオーガナイザー・編集者としては当時の私よりよほど優れていて、執筆者会議の運営、各執筆者への執筆内容の指示、第一稿への十全なコメント（書き直し指示）等、本来出版社の編集者がすべき仕事も含めて、编者であるご自身が納得するまで詰めていかれました。ただご自身の論考（第四章「金解禁論争」）については、刊行スケジュールが決まっていたこともあって、心残りがあったようです。これが後述の遺稿につながっていきます（全面改稿の上『近代日本貿易史研究』に収録の予定）。

(25) 西田長寿・萩原延壽・川崎勝・杉山伸也編『馬場辰猪全集』（全4巻）1987-88年；杉山伸也「国際環境と外国貿易」梅村又次・山本有造編『開港と維新（日本経済史3）』1989年；杉山伸也「国家を超える可能性」宇沢弘文編『国家とは（岩波講座 転換期における人間5）』1989年；杉山伸也「情報革命」西川俊作・山本有造編『産業化の時代 下（日本経済史5）』1990年；W. G. ビーズリー／杉山伸也訳『日本帝国主義 1894-1945——居留地制度と東アジア』1990年；杉山伸也『明治維新とイギリス商人——トマス・グラバーの生涯』岩波新書、1993年。

(26) 『近代日本の国際環境と外国貿易』という仮タイトルで1999年6月1日に社内企画決定。

(27) 山本武利・田中耕司・杉山伸也・末廣昭・山室信一・岸本美緒・藤井省三・酒井哲哉編集『岩波講座「帝国」日本の学知』（全8巻）、岩波書店、2006年。

(28) 『「帝国」の経済学』の構成は、序章「国際環境の変化と日本の経済学」（杉山伸也）／第一章「経済立国日本の経済学——渋沢栄一とアジア」（島田昌和）／第二章「明治経済の再編成——日清戦後の経済構想」（佐藤政則）／第三章「経済法の整備——条約改正の政治経済学」（小沢隆司）／第四章「金解禁論争——井上準之助と世界経済」（杉山伸也）／第五章「日本資本主義論争——制度と構造の発見」（中林真幸）／第六章「「帝国」の技術者——供給・移動・技能形成」（沢井実）／第七章「「大東亜共栄圏」における経済統制と企業——満洲を中心に」（正田康行）／第八章「戦後復興の経済学——植民地喪失後の日本経済」（中村隆英）／付録「文献解題」。

『日本経済史』

この講座が終わったのちに、これも課題であった日本経済史のテキストの執筆が本格化します。2012年5月に刊行された『日本経済史 近世—近代』⁽²⁹⁾の元になった企画は私が入社する以前の1987年から構想され、当時編集が進行していた「シリーズ日本経済史」⁽³⁰⁾のなかから生まれてきたと思われます。⁽³¹⁾

企画を決めた当時の編集担当者と次の担当者もすでに定年退職していて、担当者は3代目の私しかおらず、改めて先生と企画の練り直しを始めました。先生が本書の「おわりに」に書かれているように、企画決定時は「幕末「開港」以降の時期を対象に『近代日本経済史』として刊行されることになって」いましたが、上記の「シリーズ日本経済史」の成果を踏まえた時に、対象範囲は16世紀後半から20世紀後半までのおおよそ400年に拡大しました。

編集者として先生と対峙するのは大変で、担当についた日本史を専門にしている校正者が日本史業界では権威のある某事典を典拠にして出した校正疑問に対して、先生は「事典の記述の方が間違っている」と反駁したことも一度ならずあり（実際、事典の記述時期が古く、その後の研究の進展から記述は誤っていたことがわかるのですが）、著者校正時には、全体を通した記述の不整合を統一し、上記の校正者疑問に応え、原稿執筆時以降に明らかになった諸研究の最新成果を取り込むために、初校校正刷（ゲラ）への入朱は膨大になりました。

頁数も企画の練り直し後に想定した400頁から600頁弱へと膨らんだにもかかわらず、先生は編集サイドのダウンサイズ提案にほぼゼロ回答でした。400頁を想定して定価計算をして、いったん刊行予定を公表したものの⁽³²⁾、とても間に合わず刊行延期となり、さりとていったん公表した価格を変更することはできず、600頁の本にしては「お買い得」な価格になりました。本の束（厚さ）^{つか}については、先生が「ここまで膨らんだのだから、厚みを出した存在感のある本にしたい」ということで（薄い印刷用紙を使えば、見た目3分の2ぐらいにはできたのですが）、あの厚さになりました。一部では「弁当箱」と言われているようです。

『近代日本貿易史研究』への道

『日本経済史』刊行後、先生は、「グローバル経済史」をテーマに2冊目の岩波新書を構想され、相談を受けた私は、新書編集部の同僚を紹介し、それは2014年に『グローバル経済史入門』⁽³³⁾として完

(29) 杉山伸也『日本経済史 近世—現代』岩波書店、2012年5月18日刊行。

(30) 梅村又次・新保博・中村隆英・西川俊作・速水融・安場保吉・阿部武司・猪木武徳・尾高煌之助・斎藤修・宮本又郎・山本有造編『日本経済史（全8巻）』岩波書店、1988–1990年。

(31) 『近代日本経済史』というタイトルで、1988年2月17日に社内企画決定。

(32) 「岩波書店 新刊案内」2011年8月号、10頁には、「400頁、定価3990円、8月30日刊」と記されている。同様の広告が、同時期の月刊誌『図書』『世界』『思想』の巻末にも掲載されている。

成しました。私は最初の相談と刊行後の「打ち上げ」だけに関わりました。

同時期の2014年3月に先生は30年勤めた慶應義塾大学経済学部を定年退職されました。その後に先生に今後の研究についてうかがう機会があり、先生は大学の仕事がなくなって自由な時間ができたので——先生は大学行政、学部の授業は苦痛だったようです——、やり残した研究を進めたいと言われました。

その後の先生の研究活動は、以前書いた論考を単にまとめることではなく、執筆時以後の研究成果を踏まえた、全面的な書き直しと、新たな研究活動だったことは皆さんもよくご存知だと思います。

その中で、上記の『近代日本の国際環境と外国貿易』（注26参照）の再始動が、先生と私の仕事となりました。本の構成は、先生が1980年代から発表された論考がベースになっていますが、上記のようにほぼ全面的な書き直し+書き下ろしで、先生のご体調のこともあって、コロナ禍の2022年に最終的な目次構成が固まり、書名も『近代日本貿易史研究』⁽³⁴⁾と改まりました。私の定年退職（2026年3月）が射程に入ってきましたので、「私の定年までには本にしましょう」という約束をして——出版社勤務の編集者には「定年」がありますが、著者には「定年」がありません——、論考のやり取りを何回か繰り返し、2025年7月にメールで最終稿をお預かりしました。入院の話もうかがっていて、「退院後に著者校正ですね」というのが結果的に最後になりました。

原稿整理を進めながら感じたことは、必要に応じた既発表論文からの大きな書き直しです。改めて先生のお仕事の凄さに驚くばかりです（19世紀後半の日本が受けた「外圧」に関する論考や、開港後条約改正までの「居留地貿易」に関する論考のように、「基本的な枠組みには書き直しの要を認めない」と言われたものもあります）。

出版社として、責任をもって校正刷（ゲラ）を作成します。しかし著者校正をして、「はじめに」や「あとがき」⁽³⁵⁾を書かれるはずの先生がいらっしやらない、という現実はどう対処すれば良いのか、途方に暮れることもしばしばです。神田先生をはじめとする方々のご協力を得て、2026年の先生のご命日までには形のあるものにして、読者に届けるのが使命だと考えています。

おわりに

最後に、「著者」と「編集者」との関わりで言えば、先生が付き合った他の出版社（慶應義塾大学出版会、弘文堂、清水書院、東京大学出版会、同文館出版、ミネルヴァ書房、有斐閣……）や、岩波書店の先輩方からうかがう先生は、「厳しい」の一言に尽きるようです。先生には常に執筆・出版に対する真摯なお気持ちがあり、その高いレベルを編集者や共著者にも求めていたということは明らかでした。

(33) 杉山伸也『グローバル経済史入門』岩波新書、2014年。先生は生前、担当編集者と本書の改訂を準備していた。

(34) 2022年12月9日、社内決定。

(35) 先生のパソコンのハードディスクには「あとがき 20250529.docx」という未定稿が残されている。

しかし、私には最初から先生が「げた」を履かせてくれていました。その「げた」は、1985年のゼミの開講時、すなわち内部進学のもの知らない20歳の若者と、気鋭の36歳の研究者の出会いに始まりました。その若者に、研究とは何か、執筆とは何か、編集者には何が必要かを温かく語り続けていた先生がもうおられないという寂しさを日々感じています。

付 草創期の杉山研究会

杉山研究会は、先生が1984年慶應義塾大学経済学部に着任された翌85年4月に始まりました。入ゼミを考える当時の2年生にとって、入ゼミ説明会で同じ日本経済史の速水融先生のゼミ代表の方が、「近代以降を学びたい人は杉山ゼミへ」と誘導するぐらいの情報しかなく（先生が早稲田大学出身ということもありました）、「新設ゼミ⁽³⁶⁾だから選考は楽だろう」と考える学生もいたと思います。

実際の入ゼミ選考は、日本経済史の基本書3冊⁽³⁷⁾を事前に読んだ上での面接ということでしたが、3冊全て読んだ人は皆無（？）だったにもかかわらず、選考結果は全員合格でした（なお第1期のゼミ生は当初16人で半数が内部進学者でした）。

三田の火曜日3限に先生が担当の特殊講義「近代日本経済史」（当時、基本科目の「日本経済史」は、速水先生が木曜日の2限に担当されていました）があり、4限がゼミの英書講読⁽³⁸⁾、5限が和書の輪読⁽³⁹⁾でした。日本経済史のゼミだから、英語はやらないという甘い見込み（特に内部進学者にとっては）は当然のようにはずれ、英語の予習が不十分で、先生によく叱られました。3年生しかいない、週に2コマのゼミでしたが、準備も含めて相当に濃密な時間だったという記憶があります。

翌年1986年に第2期生19人が入ゼミし、9月の後期からは、第1期生の卒論報告が始まりました。4限、5限のゼミが通常通り行われた後の6限18時からのスタートでした。4年生の報告がひどかったのか、三十代後半の先生がエネルギーだったのか——おそらくその両方で——、先生の舌鋒鋭いコメントに4年生が立ち往生して、しばしば終了が22時を回り、ゼミが行われていた第一校舎の教室から見える東京タワーの照明が消え、警備員さんに早く帰って欲しいと指導され、教室を放り出されて空腹をかかえたゼミ生が大学正門の前に立ち尽くすことが何度もありました。

他方、ゼミ生が研究室に質問に行けば正面から対応され、夏休みに藤沢のご自宅にゼミ生を食事

(36) 1985年の新設ゼミは、杉山ゼミの他に、丸山徹先生の数理経済学・経済学説史のゼミと、故浜田裕一郎先生の理論経済学のゼミがあった。

(37) 山口和雄『日本経済史 第二版（経済学全集5）』筑摩書房、1976年；石井寛治『日本経済史』東京大学出版会、1976年；正田健一郎・作道洋太郎編『概説日本経済史』有斐閣、1978年の3冊。

(38) 最初の原書講読は、Alexander Gerschenkron, *Economic backwardness in historical perspective: a book of essay*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1962.

(39) 最初の和書は、石井寛治・関口尚志編『世界市場と幕末開港』東京大学出版会、1982年。本書を先生は、『社会経済史学』第49巻第4号（1983年12月）で書評しており、この書評は『近代日本貿易史研究』に収録の予定である。

に呼んでくださったり、ゼミ合宿では野球を一緒に楽しんだり（先生は神奈川県立湘南高校野球部出身でポジションはショートだったそうです）、三田で飲みに来て行ってくださったりと、よくゼミ生の面倒をみてくださったと思います。

先生が四十代になり、1990年夏にサバティカルから戻られた後のゼミは、聞く限りにおいては、あのエネルギッシュな空間からはだいぶ変化したようです。おそらく草創期のゼミ生（1985年から89年までの第1期生から第3期生）が持っている先生のイメージは、その後のゼミ生のものとは違っているのではないかと、そう感じる事が多くあります。

6. 社会経済史学会と杉山先生

馬場 哲（東京大学名誉教授）

私に与えられた題は「社会経済史学会と杉山先生」です。

杉山先生は多彩な研究活動を展開され、福澤諭吉協会、経営史学会など多くの学会に関わっておられましたが、学会活動の中心は社会経済史学会であったと思われます。私は、杉山先生が『社会経済史学』の編集委員長に就任されたときに編集委員会に入り、先生の代表理事1期目のときには総務担当の常任理事として先生を補佐する役目を仰せつかりました。また、先生の次の代表理事として学会運営について折に触れてご相談させていただきました。こうした関係から本日ご指名をいただいたと思っております。

杉山先生の世界経済史学会との関わりは、早稲田大学の学生時代に遡ります。先生の恩師である正田健一郎先生が長らく学会の要職を務められ、事務局も早稲田大学に置かれていた関係で川勝平太先生ほかの方々と学会事務の手伝いをされていたという話を伺ったことがあります。ただ、詳しいことは私も存じません。

『社会経済史学』に論文をはじめて発表されたのは1978年ですが、学会運営に関わられるようになったのは、1993年に編集委員・幹事に就任されてからと思われます。そして1997年から斎藤修編集委員長のもとで副委員長、2001年から編集委員長に就任されています。理事になられたのは、比較的遅く編集委員長と同時の2001年で50歳を過ぎてからですが、その後2014年に代表理事を退任されるまで14年間常任理事を務められました。

学会の機関誌である『社会経済史学』は創刊以来長らくA5判縦書きでしたが、第65巻よりB5判横書きとなり装いを新たにしました。編集体制・印刷所もそれまでの開明堂（浜松）からシナノ印刷に変わり、当時法政大学出版局におられた勝康裕さんに編集を担当していただくという体制に変わりました。杉山先生が編集委員長になられたのはその頃です。先生は大学院修士課程修了後ロンドン大学に留学されるまでしばらく国際交流基金で編集のお仕事をされていたと聞いていますが、

審査・編集作業に対して非常に厳しい態度で臨まれていたように思います。

今はだいぶ変わっているかもしれませんが、当時は8月を除いて毎月第一土曜日の午後2時から7時頃まで編集委員会が行われることが多く、終わる頃にはぐったりとしていたものです。また、当時は編集委員1名で投稿論文を審査するという体制でしたが、対象や方法が広がるなかで対応が難しくなり、外部審査制の導入という流れが出てきたのもこの頃です。

2004年に編集委員長を退任されましたが、すぐに2005年から企画委員長に就任されました。これには驚き、斎藤先生も人使いが荒いなどと思ったものです。企画委員長を一期務められた後、杉原薫代表理事のときには無任所の常任理事としてアドバイザー的な立場におられたと思います。

そして2011～2014年の4年間代表理事を務められることになります。代表理事時代に杉山先生が進められたことは多いのですが、以下の4つがとくに重要と思われます。

ひとつめが若手育成ワークショップ（Next Tide Workshop = NTW）の創始で、これは杉山先生の発案によるものと聞いております。研究者の問題意識の矮小化という認識のもとに若手研究者に地域や時代を超えた議論・交流の場を提供することが目的で、当初は学会の重鎮クラスの方に講演をお願いし、合宿形式をとるという非常に大掛かりなものでした。その後は新NTWとして若手研究者の論文作成技術の向上に主眼を置いたものへと変わりましたが、今日にいたるまで続いていることは皆さんご存じのとおりです。

二つめが、これも若手育成と関連しますが、国際化の推進です。国際化は斎藤、杉原両代表理事のときから進められていましたが、2015年に京都で世界経済史会議が開催されることになったため、若手に対する参加支援プログラムが実施されました。もうひとつ国際化に関連する事業として英文モノグラフ・シリーズの刊行が挙げられます。これは『社会経済史学』や『社会経済史学の課題と展望』に掲載された論説・書評をテーマ別に再編して、英訳して刊行するもので、Springer社から2015～2018年に全6巻が刊行されました。この事業も杉山先生の強力なイニシアティブのもとで進められました。とくに第6巻は事情により刊行が遅れてしまったのですが、契約を果たすために途中から自ら編集の中心となられ、シリーズを完成させることに最後まで尽力されました。

三つめが情報化委員会の設置です。当時書籍や論文のデジタル化が急速に普及しており、学会としてもこの問題に対応する必要に迫られ、情報化委員会が設置されました。学会HPのリニューアル、ニュースレター発行、とくに学術情報センターによる会誌公開が停止され、現在のJ-Stageへの移行が予定されていたときであり、この結果バックナンバーの公開など社会経済史学会もデジタル化の波にうまく乗ることができたわけで、誠に時宜に合った設置だったように思われます。

さらに、当時日本学術会議で作成が準備されていた経済学分野の参照基準に対する意見表明があります。当初軽視されかけていた歴史的・制度的アプローチの重要性を強調した提言をされ、最終案にそれが反映されたことは忘れることができません。このほか、公益法人に移行するべきかどうかという問題の検討、制作委託の有斐閣から雄松堂への移行など、杉山代表理事の4年間は多くの

難題に直面した時期であったと言えますが、杉山先生はこれらの諸問題に率先して取り組まれ、武田晴人先生、江夏由樹先生、川口浩先生、古田和子先生といった方々のサポートもあり、今日にいたる学会活動の骨格を築かれたと言って良いと思われます。

このように、杉山先生の社会経済史学会へのご貢献はきわめて大きく、私も基本的にはこの路線を継承して代表理事を務めさせていただきました。

2030年に社会経済史学会は創立100周年を迎えますが、国際情勢、社会、経済、情報技術、そして学問自体が大きく変化するなかで、社会経済史学会にもこれまで経験したことのないような多くの課題が降りかかっていると思われます。その意味でも杉山先生にはこれからも率直なご意見やアドバイスをいただきたかったところですが、個人的にもやり残したお仕事がまだ多かったと思われるなかで急逝されたことは残念としか言いようがありません。

杉山先生からいただいた多くのアドバイス・ご恩に改めて感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。私のお話は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

7. 杉山君の学問的プロフィール

斎藤 修（一橋大学名誉教授）

杉山さんと私はほぼ同世代でした。正確に言えば、杉山さんが団塊の世代であったのに対して私は終戦前後生まれの学年でしたので、少しずれはありました。また大学も早稲田と慶應ではありましたが、経済史研究の流れでいうと、ほぼ同じような時代に、似たような環境のなかで教育を受けた世代です。研究対象や研究スタイルは違いますが、知り合ったのは非常に古く、⁽⁴⁰⁾ 院生時代からだったはずで

ただ、もっとも深い関わり合いが1981年に生じました。杉山さんが国際交流基金に入ってロンドンへゆき、そこから大学院へ横すべりして、Ph.D.をとられ、すぐにLSEに出来たばかりの研究センターであるST-ICERDの研究員となった⁽⁴¹⁾ころです。

私はというと、1980年の年末にかかってきた一本の電話をきっかけに、結局、慶應を辞め、一橋の経済研究所に移る決心をしたときでした。実際に最終的な決心をしたのはその年度の雑務がすべて終了した81年3月ころだったと思いますが、私のゼミの先生であった速水融先生にはすぐにその旨を伝えました。意外なことに、速水先生は私の慶應を辞めるという意思決定に「そうか」といっただけで、何もコメントはありませんでした。唯一聞かれたのは「君の後任は誰がいいと思う？」と

(40) 早稲田の正田健一郎ゼミ門下生のもう一人、川勝平太さんと一緒であったように思う。

(41) ST-ICERDは、Suntory-Toyota International Centres for Economics and Related Disciplinesの略称。

いうことでした。これは思ってもみなかった質問で、一瞬、返答に窮しました。が、すぐに「それは早稲田の杉山君でしょう」と応えました。速水先生はこれに対しても、否定的なことは一切いかなかったように記憶しています。

というわけで速水先生と私の間では、私の後釜は杉山君ということで固まってしまいました。速水先生がいつからこの人事を動かし始めたのかは知らないのですが、同じ1981年に私が英国に行く用事が生じたので、そのときロンドンの杉山君に連絡をとり、直接会って意向を確かめることになりました。具体的に何月だったのかは記憶にありませんが、初夏だったように思います。その話を切り出すと杉山君はちょっと意外そうな表情をしました。いくつか質問は受けたと思いますが、イエスともノウともいわずに、しばらくお喋りをして別れたように記憶しています。帰国して速水先生には「杉山君は必ずしも否定的ではなかった」という報告をしました。

私の関与はそこまでで、その後、同じ年のどこかで速水先生がコンタクトをとり、最終的なイエスをもたらったのだと思います。杉山君が出した条件は、1983年度からではなく、一年後からということだったのでしょう。1984年4月に慶應義塾大学経済学部日本経済史担当助教授の杉山伸也が誕生したのです。

日本経済史研究における杉山さんのスタンスは、幕末開港以来の日本経済の発展に国際的契機と外国貿易の面からアプローチするところに特徴がありました。2025年の正月、慶應義塾における福澤先生誕生記念日では杉山さんが講演者だったのですが、その冒頭で「私の専門は日本経済史、なかでも日本の産業化と貿易との関係について研究してきました」といわれていますので、⁽⁴²⁾ご本人も自覚していたところのスタンスでした。

これは2012年出版の通史『日本経済史』をみると、よくわかります。⁽⁴³⁾その序章では、国内経済の成長を追うだけでなく、「対外関係という空間軸」をも重視すると述べ、日本経済にとって輸出入の動向に規定された「国際収支」と政府の財政収支をどう均衡させるかは常に重要な課題であったと述べています。また、目次をみますと、戦前期日本経済の流れを「不平等条約下」の時代から「金本位制下」の時代へ、そして「計画経済」への急旋回と区分して叙述されていることもわかります。

金本位制の採用と条約改正後から1930年代初頭までの金本位制下にあった時代は、第一次世界大戦の一時期を除いて、政府が財政拡大によって成長を図ろうとすれば輸入超過が生じ、他方では金本位制を維持するために正貨保有の減少を食い止めなければならないというジレンマに遭遇するという時代でした。それ以前の不平等条約下の日本——それが杉山さんのPh.D.論文が対象とした時代でしたし、岩波書店からでた最初の『日本経済史』シリーズ第3巻『開港と維新』に寄稿したの

(42) <https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/other/202503-1.html>.

(43) 杉山伸也『日本経済史 近世—近代』岩波書店、2012年。

も同じテーマを論じた一章でした。⁽⁴⁴⁾幕末維新期はまだ金本位制を採用していませんでしたが、大枠はパクス・ブリタニカでありました。そのため関税を武器とすることができませんでしたので、その制約は、結局のところ約半世紀にわたって続いたともいえます。その制約のなかで経済の成長はどのようにして進んでいったのか、それが叙述の中心となるということです。

このように、『日本経済史』を出版したころまでの、前半期杉山さんの視角の基本は、政府の財政を発動させる成長戦略と国際関係秩序が課すところの規律および制約との相克ということであったように思います。私はそこから多くを学びました。ただ、しばらく考えているうちに、国際的な規律と制約に直面したのは政府だけだったのではなく、投資財の購入と製品輸出のために貿易市場と対峙していた企業もまた同じ状況におかれていたことにも、もっと目を向けるべきではなかったかと、思うようになりました。

たとえば、戦前の鉄鋼業にかんする優れた分析をした岡崎哲二さんのモノグラフでは、その点に触れられています。⁽⁴⁵⁾パクス・ブリタニカ体制に組み入れられたことによって保護関税の導入等が強く制限されていたため、政府による保護育成の製鉄業も典型的な輸入代替路線の推進は難しく、金本位制下の国際競争が産業と企業をスクリーニングした結果を前提とせざるをえなかったというのです。このコメントを逆から読めば、伝統産業や中小企業に注目し、労働集約的工業化論を提唱した杉原薫さんの比較経済史へのコメントにもなります。⁽⁴⁶⁾労働集約的な産業による工業化が進んだのは、金本位レジームの下におかれた後発国は比較優位がある労働集約的な製品を輸出することによって製造業の規模を大きくする途を選択せざるをえないという、国際環境からくる制約が効いていたからです。

総じて杉山さんの戦前期日本経済史論は産業史的ではなく、大企業の戦略や伝統産業の対応といった生産者の行動への言及は多くありませんでした。経済の部門構成の変容、あるいは製造業における規模別構造の変化といった分析への関心もなかったようにみえます。もっとも杉山さんの著書目録をみますと、石炭産業史の研究、北海道におけるその衰退過程の分析という重要な一冊がありま⁽⁴⁷⁾す。しかしそれは、慶應義塾図書館が所蔵する昭和から平成にかけての膨大な石炭関連産業資料群の整理と研究という、公的な要請も背後にあったのではないかと、杉山さんの初発の問題関心は鉱工業の個別実証研究を掘り下げるところにはなかったのではないかと、私にはそのように思えます。

(44) Shinya Sugiyama, *Japan's industrialization in the world economy 1859-1899: export trade and overseas competition*. London: Athlone Press, 1988; 杉山伸也「国際環境と外国貿易」、梅村又次・山本有造編『開港と維新』日本経済史 3, 岩波書店, 1989 年。

(45) 岡崎哲二『日本の工業化と鉄鋼産業——経済発展の比較制度分析』東京大学出版会, 1993 年。

(46) 杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房, 1996 年; 同『世界史のなかの東アジアの奇跡』名古屋大学出版会, 2020 年。

(47) 杉山伸也・牛島利明編『日本石炭産業の衰退——戦後北海道における企業と地域』慶應義塾大学出版会, 2012 年。

それにもかかわらず、幕末開港から第二次世界大戦期までの日本経済史を、幕末の不平等条約締結から金本位体制への参加という国際経済秩序の変遷のなかで描き切ることができたというところに、他の概説書とは異なる独自性があったといえるのではないでしょうか。

杉山さんにはもう一つの重要な研究分野があります。パクス・ブリタニカという国際秩序が創られた背景に情報通信インフラの整備があったことはこれまでに研究で明らかにされているところですが、日本国内に眼を向けると、明治期には情報革命と呼ばれる郵便や電話の速やかな普及がありました。亡くなる直前に『近代日本の「情報革命」』と題して出版された本は、この分野の研究を本としてまとめたものでした。杉山さんのなかではこれも、対外関係と日本経済の発展という第一の問題関心とつながっていたのかもしれませんが、分析的には別個の、独立したテーマで、主として後半期を特徴づける研究だと思います。そしてそれを情報産業の歴史的研究としなかったところが、また杉山流でありました。

後半期といいましたが、そのテーマに手がつけられたのはだいぶ前のことで、すでに1990年出版の本に「情報革命」と題する一章を載せています。私も参画した岩波の『日本経済史』シリーズの一冊『産業化の時代』下巻でした。⁽⁴⁸⁾ 私はその直後に、山川出版社から出ていた『年報近代日本研究』の第14号を政治史家の三谷博さんと一緒に編集するよう要請され——編集といっても、ただ個々の論稿を集めるのではなく、研究会を重ねて一冊をつくるミニ・プロジェクトでしたが——私が経済分野を担当しましたので、そのメンバーの一人として杉山さんに入ってもらったところ、杉山さんは「情報ネットワークの形成と地方経済」と題する論文を書いてくれたのです。⁽⁵⁰⁾ 「明治維新の革新と連続：政治・思想状況と社会経済」を特集タイトルとしたその号が出たのは1992年のことでした。

この分野の研究が興味深いのは、それによって杉山さんに地方経済への志向が生まれたこと、それを通じて製糸業という産業へ関心が生まれたことでしょう。情報革命論の本では検証の対象として群馬県と長野県が選ばれ、両県の主要産業であった製糸業の存在感が、郵便と電信利用の地理的分布の検討を通じて、情報革命論の構図のなかにおいて明瞭に位置づけられることとなりました。

もう一つは、この情報革命の経済史が福澤論につながっていることです。先ほども紹介したように、福澤先生誕生記念日の集いに講演を依頼されたときテーマに選んだのは福澤先生の『民情一新』で、いわば福澤論における『民情一新』の位置づけにかかわる問題を扱っているのです。

福澤の『民情一新』への言及もかなり古く、岩波『日本経済史』シリーズの『産業化の時代』に載

(48) 杉山伸也『近代日本の「情報革命」』慶應義塾大学出版会、2024年。

(49) 杉山伸也「情報革命」、西川俊作・山本有造編『産業化の時代』下、日本経済史5、岩波書店、1990年。

(50) 杉山伸也「情報ネットワークの形成と地方経済」『年報近代日本研究』第14号、特集「明治維新の革新と連続」山川出版社、1992年。この研究会には古田和子さんにも参加していただいた。本号における同氏の寄稿を参照。

せた「情報革命」論文においてすでに『民情一新』からの引用をしていました。福澤研究は研究者の多い分野ですが、『民情一新』の位置づけはあまりはっきりしておらず、政治史・政治思想史家の間では国会開設論との関係で論じられるのが一般的だったそうです。杉山さんは『近代日本の「情報革命」』の第7章において⁽⁵¹⁾、それを文明の経済史の基本的考え方を提示したものとして読むべきだと述べます。福澤には状況的思考があったのはたしかではあるけれども、ここは『民情一新』の執筆をするなかで文明史の論じ方を変えたと読むべきである。人類史における19世紀は科学技術の発展の上にたつ「蒸気の文明」で、その意味で産業革命以前とは明確に区別されるべきであり、「文明の利器」である輸送手段や情報伝達手段の革新が経済を動かし、人びとの生活を豊かにしてゆくという因果連関が働くようになった。後半期福澤は、このような認識を文明論の基礎におくようになったというのです。

これは、杉山さんが福澤論への新解釈をとおして、一つの経済史観を提示したということもできるでしょう。もっとも、運輸通信手段の革新と人びとの豊かさとの関係はそう直線的ではないでしょう。昨年にこの『近代日本の「情報革命」』をお送りいただいたときそのように感じました。そして、礼状にその感想とコメントを付記しました。それはおおむね以下のようなものでした。

情報通信ネットワークの発達は都市を基盤とする。戦前期日本の場合もそうだったであろうから、結果として地方の資本や人材は都市経済に吸い寄せられてしまうということはなかったのだろうか。つまり経済地理学でいわれる「ストロー効果」が働く場合があったのではないか、製糸業地域の場合、大阪など大都市に立地していた紡績工場の求人情報が農村部にも届くようになって、地場の製糸業が痛手をうけるというようなことが生じたのではないか——それが私のコメントでした。この私の感想に対して杉山さんは丁寧な返事をメールで送ってくれ、情報といっても、歴史家が使えるのは集計量で、手紙や電信の中身を分析することができないので難しいといいながらも、次のように述べていました。

「情報ネットワークのストロー効果については、情報の内容自体が不明なうえに、交通ネットワークのように統計的にも明示的ではないので、よくわかりませんが、インターネットが普及して情報が平準化しても、デジタル・デバイドによる中央と地方との格差は拡大する一方なので、市場規模と人間の意識の問題に関係するのかなと思います。……」

労働市場で、紡績工女〔ママ〕になるか製糸女工になるかの選択の要因については、以前から気になっていましたが、たしかに情報の問題として処理できれば情報革命論として論じられるように思えます。⁽⁵²⁾」

(51) 第7章のタイトルは「福澤論吉『民情一新』と「文明の利器」」である。

(52) 2024年9月14日付の筆者宛eメール。

これは、杉山さんの頭のなかでも、この情報革命論がまだ完全に出来上がったとは考えていなかったことを示唆してはいないでしょうか。実証面では——利用可能な資料の当てがあるかどうかは別として——ずっとそう思っていたのではないのでしょうか。実際のところ、杉山さんには情報の経済史に限界を感じた時期があったそうです。それが、福澤の『民情一新』をどう解釈すべきかがはっきりし、その結果としてモヤモヤしていたのが吹っ切れ、情報の経済史に新たな地平がみえてきた。まだやる余地があるかもしれない——こう考えるようになったと、私には思えるのです。

そのメールでは杉山さんを苦しめてきた冠動脈疾患と2度にわたる手術にも触れられていて、病院のベッドにいた間、「人生の残りの時間を〔ママ〕中途半端で終わっていた研究を形にしようという気持ちが強くなった」と書かれていました。「研究を形にしよう」というのには、既発表のペーパーを集めて一冊の本にすること以上の何かがあったはずです。しかしそこからのさらなる展開の可能性は、予期せぬ転倒事故とそれを引き金とする急性硬膜下血腫によって失われてしまいました。まことに残念でなりません。

8. おわりに——「お別れの会」に参加して

河井啓希（慶應義塾大学経済学部長）

杉山伸也先生とは部会も異なり、学部業務でも一緒にする機会はなかったが、颯爽とBMWから降り立ち、明るくお声がけくださるという、いつも快活な先生であった。そんな先生が亡くなられたという知らせを受け、弟子の神田さやこさんのお声がけもあり、「お別れの会」に参加させていただいた。

会には清家篤元塾長や経済学部の教員、教え子の方々だけでなく、職員の方々や退職された慶應義塾経済学会の秘書さんなど、多くの交流のあった方々が集まっておられた。その様子からも、先生の分け隔てのないお人柄がうかがわれた。

会の冒頭では、先生がお好きだったという「丘の上」がアカペラで歌われた。

「丘の上には空が青いよ　ぎんなんに鳥は歌うよ歌うよ
ああ美しい我等の庭に　知識の花を摘みとろう」

塾生にはおなじみの歌詞であるが、私はこの日、この歌に初めて深く心を打たれた。

その後の皆様のお話から、ご研究のことや、亡くなられる直前まで多くの研究のアイデアを抱えておられたことを知り、志半ばでさぞご無念であったろうと胸が痛んだ。しかし一方で、これほど

多くの弟子や同僚に愛され、盛大に見送られ、これからも人々の記憶に残り続ける杉山先生は、学者として、また一人の人間として、本当に幸福な方であったのではないかと、少し羨ましくも感じた。

悲しさよりも、杉山先生の青い空のような清々しさを感じる、とても良い会であった。このような会を企画してくださった神田さんをはじめ、杉山ゼミ OB・OG の皆様に心より感謝申し上げたい。